

---

# 居候な魔王さま

花鏡

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

居候な魔王さま

### 【Nコード】

N4820BA

### 【作者名】

花鏡

### 【あらすじ】

貴衣の非日常的な日常生活。

## 拾い物と拾い主

春。

どこからか桜の花びらがひらりひらりと落ちてくる。うららかな春の日の昼下がりで、日差しは暖かくて風も強くなく、自宅へ向かう住宅街のアスファルトはどこか白く輝いて見える。

買い物帰りで荷物は重いが、趣味の一つである裁縫の為にかけた古着物市で、掘り出し物を購入できご機嫌な篠崎貴衣は、自然と鼻歌を歌いながらのんびりと歩く。少し離れたところにある公園から、小さな子供のはしゃぐ声がかすかに聞こえる。

そんな道端に大きな犬が座り込んでいた。

後ろ姿であるが恨まれそうな勢いの顔が怖い大柄なシベリアンハスキーな体毛の姿。

その首につけられた赤い首輪で、脱走癖のあるご近所の佐々木さん家の飼い犬ゴンちゃんだと貴衣はすぐにわかる。

名前はゴンちゃんだが、花も恥らう菜食主義な2歳の女の子である。この辺りでシベリアンハスキーは、佐々木さんしか飼っておらず、顔は大変恐ろしいが、とても穏やかなゴンちゃんはご近所さんに人気者である。

吼えることもせず、小さな子が触っても噛むことをしない。尻尾をつかまれても怒ることもしないし、むしろ遊び相手としてあやしていることさえある。ご近所さんの飼い猫たちが散歩し、ゴンちゃん

んの周辺で昼寝をしている光景は大変和むものである。

話はずれたが、そんなゴンちゃんは時々家から脱走する。とはいっても、家が見える位置まで少し出歩き、迷子な子猫や巣から落ちた鳥の雛を見守っていたりするためである。

「ゴンちゃんどうしたの？また子猫でも見つけたの？」

貴衣が声をかけると、ゴンちゃんは困った顔で振り向き薄い水色の瞳で見上げてくる。

そのゴンちゃんの足元には黒いぼろぼろの布の塊が一つ落ちていた。

本当にぼろぼろであった。

あちこち引っ掛けたり千切れたりとぼろぼろの繊維の塊を辛うじて摘める部分をつまみ、貴衣はひっくり返す。

60cmほどの薄汚れた人形であった。

手足はがりがり、髪は土埃で元の色がわからないほど汚れているが、精巧な作りであった。昼間の大変明るい時間だからよいものの、絶対暗くなってからは見たくないものである。はつきりいつて泣くほど怖くなり、お被いにいきたくなるほど怖さをかもし出さるだろう。

「……ゴンちゃん、これ、どうしたいの？……」

どっしりおぼろげとゴンちゃんは首をかしげる。と、ぐーきゅるー

とよくあるような大きな腹の虫が聞こえる。

「ゴンちゃんお腹すいてるの？キャベツ食べる？」

「ごそごそと買い物袋からキャベツを取り出しているとぐるーきゆるるーと、再度盛大に腹の虫が聞こえるが、どうにもゴンちゃんがだしたようには聞こえない。」

「お腹…すいた……」

本当にか細かいかすかに聞こえる声で、ぼろ布の塊を身に着けた人形がほんの少しだけ、動く。そのがりがりな手を貴衣の持つキャベツに伸ばそうとし・・・力尽きたようにパタリと落ちる。

あまりにもびっくりしすぎると声も出ないものだと、そのとき初めて貴衣知ったのであった。

拾い物と拾い主（後書き）

牛歩な更新な予感大です。

## 拾い物と拾い主 2 (前書き)

まずは母で餌付けです。

## 拾い物と拾い主 2

新聞紙の敷かれたテーブルの上にいるそれを、貴衣はどうしようかと悩んだ。

それはぺたりと新聞紙の上に座り込み、細すぎる両腕でで苺を抱え一心不乱に食べている。

結局お持ち帰りしたぼろぼろの動く人形モドキである。見た目的に大変ホラー過ぎるが、春の日差しがホラーフラグを根底から叩き折っていると信じたいところである。

ジャムにしようと思った小さな苺で、人形モドキの大きさから苺自体は巨大すぎるというものでもないが重そうで、持ち上げている腕はプルプルと震えている。

見れば見るほど非常識な存在だった。

北海道名物ロボツクルや、代わりに靴を縫ってくれる小人よりは多分大きい、人間かといわれると小さすぎるような気がする。

確かに人間でも病気で成長せずに小さなままな人もいるが、それでも60cmというのはないだろうし、等身的には釣り合いが取れている。

高性能ロボットかとも考えたが、ものを食べるのかと却下した。



第一そんなロボットが道端に落ちているほど、安い代物でもないだろう。

食器棚に入っていたお猪口に自分のカップから紅茶をスプーンで移し、おやつに買ったワッフルをすこしちぎったものを乗せた小皿と一緒に、苺をむさぼる小人モドキの側置く。

「ワッフルもあるから食べれるなら食べてね。ここのワッフルは柔らかくて甘さ控えめで美味しいから」

声を掛けるとはっと小人モドキは苺から顔を上げる。

「お、お礼も言わずにすみません！本当にありがとうございます！」「！」

苺をワッフルの乗った小皿の隅に置き、畏まった様に正座しぺこぺこと小人モドキは頭を下げる。

しきりに恐縮し、頭を下げる小人モドキのその様が米つきバツタのようで、貴衣はぷつと吹き出す。

「いやー、そんなに頭下げなくていいし、いいから食べちゃいなよ」

笑いながら勧めると、小人モドキは深々と頭を下げいただきますと再度食事に戻る。

結局小人モドキは苺2粒とワッフルを完食し、ようやく落ち着いたのかお猪口に入れられた紅茶を飲む。

「私は篠崎貴衣、貴衣って呼んでね。それであなたの名前は？」

自分用の2杯目の紅茶をポットから注ぎ、貴衣は小人モドキを見る。

小人モドキは砂やなんやで汚れに汚れぼろぼろになった布の塊と、同様な髪によって目が見えず、表情がわかりにくい。辛うじてわかる口も見える限りではとても良い形である。

「ハナエルといいます、一応魔王です」

再度ぺこりと小人のハナエルは頭を下げる。

「……………魔王…悪魔ってこと？」

こんなに日本の営業にあくせくするサラリーマンのごとくぺこぺこする悪魔だと、世の中平和なのかそれとも日本サラリーマンは悪魔と同じなのかや、実はこの姿は人を欺く目の姿で実力は恐ろしいほどで…。などちらりと貴衣は考えはするが、わざわざ自分をだますほどのメリットはまったく考えられないので、曖昧な表情を浮かべる。

「いえ…あの、魔王っていつでも、種族の名前がという意味で、あんな怖い悪魔とかと一緒にありません！」

小さな手をぎゅっと握り締め、ハナエルは力説する。

どつやら魔王と悪魔は別種であるらしい。

さらりと悪魔が存在することを肯定したようだが、色々幼馴染のことを考えると、いてもおかしくはないのか？と妙に納得する。

「魔王さまなのに、行き倒れてたの？」

お腹をすかせ倒れていたのである。ちなみにゴンちゃんはこの小人モドキを運ぶときに自宅まで付き添ってくれた。よくできた犬である。顔は怖いが。

「えと、えと…」

もたつくハナエルの説明をまとめると、「連れ去られて脱走したらトンビに襲われて運ばれている途中他のトンビと空中戦になって服が破けて落ちた」ということのようなようだ。

その落ちたところでゴンちゃんが駆けつけてくれたため、トンビたちは手出しできずあきらめて飛び去った…のかもしれない。やさしいゴンちゃんならやりそうなことである。

ふむ、と貴衣は少し思案すると「んー…ま、ちょっと知り合い呼ばせてもらうね？」と断りをいれ、携帯を取り出すとどこかにかける。

「悠ちゃん、貴衣だけど家にすぐ来れる？……わかった、30分後ね」

それまでにお風呂入ろうかと、ハナエルは風呂場に運ばれ貴衣によつてあれよあれよと言う間に香り良い泡に包まれる。

髪も体も何度も洗われ泡が色がつかなくなると、仕上げに髪には香りの良いオイルを少しつける。

その間にも、キラキラヘアとか体細いなあなど等、貴衣はつぶやく。

ふかふかのスポーツタオルでやさしく全身の水分をふき取ると、貴衣はソファの上に軽く畳んだバスタオルを敷きその上にスポーツタオルにくるまれたハナエルを乗せた。

「ちょっと片付けたり物持ってくるから、ぬれる範囲でこの傷薬塗ってね。あ、傷薬とか大丈夫？」

「あのあの、傷とか自分で治せるので、薬は大丈夫です……」

あまりの目まぐるしさに目を回しながらハナエルは答える。

それじゃ、髪の水気取っていてねと、貴衣はさつさとどこかにいっってしまう。

取り残されたハナエルは、言われたとおりにはスポーツタオルの端の方で、自分の髪を軽く叩くように水分を取る。

ちくたくと置時計が刻む秒針と、自分が叩くタオルからのぼふぼふという音、部屋の置くから聞こえてくる冷蔵庫の低音の音に、ハナエルは心細くなる。

つんと鼻の置くが熱くなり、じわりと涙があふれる。

これまで休むことなく流されたハナエルにとって、限界まで張り詰めたものが切れそうな、そんなときに……。

「ハナちゃん、これなんかどうかな……！」

ばたばたと騒がしく貴衣がなにかをもって部屋に飛び込んでくる。

まさしく飛び込んできた。そして、がっという音がし、のーのーと貴衣が叫ぶ。飛び込んだ衝撃でバーンと扉が跳ね返り、貴衣の額に当たったのだ。

ハナエルは驚き、こぼれそうであった涙が引っ込む。

「で…これ、どうかな……うう、痛い…」

差し出されたのは、なぜかハナエルに丁度よさそうな、シフォン生地ワンピースであった。

## 拾い物と拾い主 2 (後書き)

貴衣は我が道を行く人ですが、時々注意力はなくなります。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4820ba/>

---

居候な魔王さま

2012年1月14日01時46分発行